

べし。

〔長崎聞見録〕唐人館

唐人館は、東北に山をかたどり、西南の方に出入の門あり、その三方は、きびしく二重に圍みあり、無用の者は猥りに入事あたはず、所以を求て此館内に入、委しく見たり、菓子煮賣藥種等の店あり、又常の唐人、部屋々々多くありて、その門戸々々にはことごとく額聯などを掛たり、予一日船主陸明齋が客館に至るに、種々の饗應あり、器物は皆唐地の焼物にて、其焼もの、器物を乗たる臺は、日本にて製したる木地臺なり、尤其數多く並べ立て、恰も佛家百味のをんじきを備へたるにひとしかるべきなり、其品味盡く食なれざる珍奇にて、一々枚擧するに暇あらず、試に其略を論ずれば、麪粉にて衣をかけ、油にてあげたる形梅の核のやうなるものあり、是を食ふに、裏にぼりぼりとはぎれあり、口中次第にかんばしく、甘味いはんかたなし、これを尋ぬるに、鶏骨を終日砂糖にて煮る、これに衣を掛け油にてあげたるものなり、また笋のほそきを鹽漬にして、甘ぼしにしたるやうのものあり、これを食ふに、鹽味の裏に甘味を帶たり、是蘆筍の鹽づけなり、又ぶた鶏のるいを、さまざまに料理て、いさぐことに燕巢えんそうの醋のものなどは、唐にてもいたつての賓客にあらざれば、つかはざるものまでも饗應す、酒ももとより陶器に入れて、いさぐ唐酒は少し苦味のうちに醋味をおびたり、このみにより日本の酒もいさぐなり、主人は下戸のよしにて、べつに一唐人をいさぐし、獻酬饗應せしむ、また給仕人五六輩もかたはらに連立し、ときと酒茶等にいたるまでも持はこぶ事なり、さて酒酣をよべば、主人興に乗じ、愛妓を呼いさぐし、酌を取らしむ、また皆扇面をいさぐして書を乞ふ、主人魏元春といふ十七八歳なる者をよびいさぐし、執筆せしむ、たかき机あり、此まへに曲桌をおきたり、魏元春此曲桌によりて、數十の扇子一時に揮毫しをわする、是より唐茶の饗應あり、菓子は雲片糕、月餅、連環かすていら、種々蜜漬龍眼肉の類なり、さて其